

第 169 回山形県社会教育委員の会議

期 日：平成 25 年 9 月 13 日（金）

時 間：13:00～15:30

場 所：県庁講堂

1. 開 会

2. 山形県教育委員会教育長挨拶

3. 座長選出

舩田委員を選出

座 長

社会教育委員の会議を年間 3 回に増やしていただいたことについて、教育長にお礼申し上げたい。無駄にすることのないよう有意義な会議となるようにしたい。

4. 議 事

(1) 主な事業の経過報告

① 説明（佐藤室長）

② 質疑応答

舩田委員

「北海道・東北ブロック生涯学習・社会教育主管課長会議」が本県で開催されたという説明があったが、どのような方が出席されたのか。また、協議や各道・県の情報交換の中で、特に印象に残った他道・県の事業や取組みについて紹介して欲しい。

回答（佐藤室長）

課長と担当者の 2 名で参加された道・県が多かった。特に印象に残ったものは、読書活動の推進は本県を除くすべての他の道・県で生涯学習・社会教育担当課が主管課となり、家庭・地域における幼児期からの読書教育を含め生涯学習の観点で推進していることであった（山形県では、現在、義務教育課が主管して推進）。

また、青森県では、公民館の活性化を推進する取組みを県単事業で展開していることであった。

舩田委員

全国の会合でも、「公民館を充実しなければならない」という話をよく耳にする。青森県ではどのように取り組んでいるのか。

回答（佐竹室長補佐）

青森県の事業は、1 年目に研修を受けた後で独自事業を計画し、2 年目に実践する形態で行われている。事業開始 1 年目の今年、青森県内各地で多くの研修が行われている。

舩田委員

本県でも公民館運営の充実に向けた施策を策定して欲しい。

回答（佐藤室長）

公民館を拠点とする地域の活性化は非常に大きな問題。成人期の学びとも関連するので、次のグループ討議の中で多数の意見をいただきたい。

山口委員

公民館とコミュニティセンターの在り方が大きな課題であり、県の社会教育連絡協議会でも議論している。

コミュニティセンターには2通りあって、首長部局が所管するコミュニティセンターと、教育委員会が所管するコミュニティセンターがある。一見違いが無いように思われがちだが、実際の中身はずいぶん違う。

豊かな生涯学習の構築という観点からいうと、公民館のコミュニティセンター化の問題については、社会教育委員の会議でしっかり目を向けていかなければならない。

生涯学習振興という意味でも大きな問題があると思われるが、他道・県における公民館のコミュニティセンター化、指定管理者制度導入の現状様子はどうか。

安藤委員

庄内町の「余目公民館 20 周年記念イベント」で町長さん、教育長さんとお話する機会があった。その際、「公民館への指定管理者制度の導入等を検討しているが、導入した自治体ではどのように評価しているか、検証結果を知りたい」との希望があった。

自治体でも情報を求めており、公民館等に集まり学ぶ住民に対するサービスの変化等について、全県レベルの情報共有が必要である。指定管理者制度の導入事例については学会でもいくつか報告書がでている。ある自治体から事例報告していただくのもよいが、各教育事務所の聞きとり等が必要と考える。

回答（佐竹室長補佐）

北海道・東北ブロック生涯学習・社会教育主管課長会議で情報を交換したが、どの道・県でも指定管理者制度導入が進みコミュニティセンターが増加していることを認識しているものの、実態の詳細まではつかみきれない現状であった。

本県では、全ての公民館、コミュニティセンターについて、設置者、運営形態、職員の構成等についてかなり細かな調査を実施し、集計作業が終わったばかり。その結果に基づいて、施策を検討中である。

（2）社会教育の推進・生涯学習の振興策について

テーマ「成人（青年期～高齢期）の社会参画と生きがいづくり」

【グループ討議】

① 基調提案

提案者：**金澤委員**

- 成人期・高齢期の市民が生きがいを持ちながら社会貢献するような生涯学習環境の醸成
2つの新聞記事を準備した。1つは、「都内の万引き件数は高齢者の方が青少年を上回っており、生活困窮による日用品や食料品の万引きが多い」という記事。おにぎり1つ、サンドイッチ1つを盗ってしまうまでに高齢者が追い込まれてしまっていることが、とても悲しかった。もう1つは、「元気高齢者が地域を支える」という記事。高齢者の内8割は

元気な方々である。成人期から高齢期にかけて学んで社会貢献するような生涯学習の環境が必要であると感じている。

これからご覧いただく DVD は千葉県柏市の例。福祉サイドでの高齢者の生きがいづくりの内容だが、コミュニケーションのとり方、基本的な高齢者に対する対応の仕方、配慮の仕方などは社会教育の分野でもあり、本日の会議で学ぶことも多々あると思ひ持参した。会社組織で取り組んでいる例であるが、「関東での例はおよそ 10 年遅れて山形にやってくる」と言われもおり、なんらかの参考となるものと思われる。10 年後はさらに青少年の数が減り、元気高齢者の出番がいよいよやってくる。柏市では、働く場所を用意して、高齢者の生きがいにもなっている。社会教育でも関わることのできる分野であり、ぜひ参考にさせていただきたい。

DVD（団地を管理するユアール都市機構と東京大学、柏市が連携して行う「生きがい就労」という試み。研究の一環として市と大学が出資し、シニアが働きやすい仕事をつくり出す仕組みづくり）

② ワークショップ形式での話し合い（2 グループに分かれて）

③ グループ討議の発表

Aグループ 「学校と地域の連携・協働」について

発表者：**齋藤彰委員**

○ 成人の生きがいづくりについて

学校が多くのことを抱えすぎているという問題点が出された。学校で行われている地域学習は地域の方々に任せ、学校教育のスリム化を図る必要がある。

「大人の生きがいをつくる」という観点から、個人が持つ得意なことや知識を活かせる場面をつくっていくことが重要である。得意なものを学校に提供して子どもたちの役に立つことで達成感を感じ、子どもたちの喜びが大人の生きがいになる。具体的には文化祭への参加、伝統芸能、昔の遊び、自然の中での遊び等である。事例として舟形町の高齢者による親和会を紹介したい。退職後、地域のために役立とうと始めた活動が、学校と結びついて長沢悠々塾というものに発展した。四季折々の活動をしている。このように、身近な交流の輪を広げ、次第に学校や地域、子供たちと結びついている例もある。

成人期、高齢期の地域活動としては、その他にも本の読み聞かせや防犯や福祉の活動、小さな子どもや赤ちゃんと青少年がふれあう場や親の居場所をつくる活動なども考えられる。

○ 地域と学校を結ぶ人材の育成に向けた公民館機能の充実について

地域と学校を結ぶコーディネーターの育成も必要である。できれば公民館が地域の人材を育成し、人々を結ぶ核となることが望ましい。公民館が中心となって、学校で必要としていること、地域で供給できること等、様々な情報の交換・共有をできる場を作っていくことが必要である。話し合いを通してそのように感じた次第である。

○ 地域において高齢者が活躍できる機会について

前半は「どんな分野で高齢者が活躍できるか」という観点での話し合い。子供行事、地域関係、読み聞かせ、地域や子ども会の活動、キャンプ、昔語り、地域の祭り、さらには、学校・施設等での支援ボランティア、社会に馴染まない方たちへの支援、食事、料理関係、食事会、伝統行事の中での食事、郷土食、農業法人での就労、話し相手、草むしり、手紙の代筆等、様々な活躍の場が紹介された。

○ 地域活動のきっかけづくりを担う公民館の役割について

後半は「様々な分野で活動することのきっかけをどのようにつくるか」という観点での話し合い。某市には 86 箇所自治公民館がある。本来、自治公民館は地域の人やグループをつなぐ役割を担っており、公民館が中心となって地域の方々とのかかわりを大切にしながら、人材を育てることが必要である。地域住民が地域活動を開始するきっかけづくりを担い、グループを育てるのは自治公民館がふさわしい。公民館活動の中心になっていくのは社会教育である。地域活動のきっかけをつくる際には、横の関係、例えば社会福祉協議会との連携等も重要である。

○ 成人の生きがいがづくりに向けた社会教育委員の活用について

地域にある高齢者の交流の場も活用する価値があり、伝統的な行事などもグループ活動の土壌づくりにつながるものと考えられる。地域の社会教育委員による話し合いにおいても「高齢者の方が生きがいをもって生きていくためにはどうしたらいいのか」までは話が進んでいない。市町村教育委員会の事務局が招集する年度当初と年度末の会議だけでは、個々の事例について詳しく話し合う場が不足していると感じる。

○ 高齢期における物質的満足と生きがいの相違について

先の DVD の中で「一番の長生き県は、女性が沖縄県、男性が長野県。」とされ、元気で活躍する高齢者が数多く登場していた。山形でも、年々元気で長生きな高齢者が増えている。何か仕事を見つけて、毎日元気で生きていることに喜びを感じるようにしなくてはならない。以前、ある記事で読んだが、北欧の、世界一の高福祉国家で、高齢者が非常に悩んでいる実態がある。あまりにも手厚い福祉が行き渡っており、一人でも快適に暮らせ、美味しい食べ物は与えられても、子供夫婦は共働きで忙しく、孫達と会うこともできず、精神的には決して満足できていないとの事である。その記事に驚くと同時に、身近な問題として考えていくことが必要だと改めて認識したところである。今回の会議はとても有意義であり、感謝申し上げたい。

【各委員から】

阿部委員

○ 緩やかな関係を形成することの大切さについて

山形西高で今週の月曜日に東大の玄田有史先生から講演していただいた。その中から「ウイークタイズ」という言葉の重要性をご紹介します。

ウイークは弱い。タイズは結びつきのこと。学校で言えば、同僚だったり、生徒だったりというのはストロングタイズ、すなわち強い結びつき。強い結びつきをいかに強くする

かに全力を出しがちだが、実はウイークタイズの先に希望があるとお話であった。実際、本日お集まりの委員の中にも直接的間接的に知っている人が何人かいて、私が頼みごとをすると「はい」と言ってくれたり、方法を示唆して道が切り開けるようなアドバイスをくれたりする方が何人かいる。このようなウイークタイズの緩やかな関係の人をたくさんつくっていくことが子どもたちの未来や社会に希望を生み出していくという話で、印象に残り、かつ、今回の会議に関係があるかと思い、ご紹介させていただいた。

安藤委員

○ 財政削減のための指定管理者制度導入について

庄内町の公民館の 20 周年記念において地区委託もしくは指定管理者と職員の嘱託化についての講演をさせていただく機会があった。「指定管理者制度は財政削減が先に立っている。専門家に任せると市民サービスが向上するということが、一番目の理由になるはずだが、教育の営みを行政ではないところに任せただけの素地はあるのだろうか。素地があって欲しいが、段階を踏まずに丸投げはいかかなものか」ということを全国の事例を踏まえてお話ししたところ、町長からは「趣旨は分かるがお金が大変である」との実態をお聞きした。

○ 社会教育・生涯学習の数値で現れない成果を示すための工夫について

「最小の投資で最大の効果を生み出すか」ということが効率的な行政の在り方であることは理解できる。しかし、そのような中で、教育の営みや地域づくり、まちづくりの成果、つまり、「行政評価の中で社会教育・生涯学習の数値で現れない成果をどのように示していくのかを考えること」が重要であると感じる。手段の一つとして情報発信の必要がある。発信の上手な例として南陽市がある。南陽市は新聞、テレビ等のマスコミ、さらにブログ等、インターネットで「南陽市」と検索するとすぐに引っかかる。外部評価によって内部の納得を得るといふ行政手法を賢く行っている。自分たちの行っていることはどうなのか、成果を相対化することは必要で、それは住民にとっても大事なことである。

○ 公民館機能の重要性について

公民館とは箱でなくて人である。公民館によってつながっている住民相互の関係・ペースが合っこそ、機能している公民館ということができる。

岩沢委員

○ 放課後子どもプラン推進事業、学校支援事業の指導者研修会の重要性について

学校と地域の連携協働の事例としては、放課後子どもプラン推進事業と学校支援地域本部事業があり、私自身もかかわらせていただいている。指導者研修会において、以前は放課後子ども教室の必要性を説明する講義が多かったが、最近は実際に子ども達と楽しめるゲーム遊びや調理、本の読み聞かせの工夫等の具体的な手法についての研修と内容が充実し、大変助かっている。そのまま持ち帰ってすぐに実践でき、活動のマンネリ化の防止に役立っているので御礼申し上げたい。

○ 学校支援の在り方に関する研究調査の現状について（質問）

学校支援の在り方に関する研究調査は今どのような形で進んでいるか教えていただき

たい。

回答（佐藤社会教育主査）

学校支援地域本部事業の調査研究については全市町村を対象にアンケートを実施した。支援本部を設置しているところ、していないところを確実に把握し、優位差を数値等で確認しているところ。加えて、県内4地区それぞれ1支援本部をモデル指定している。例として、置賜エリアでは和田小学校の支援本部を指定し、よりよい体制づくりのために実働面での調査・研究をしている。単に調べるだけでなく、サポートする研究を進めている。今後、研修会等に加えて広報面で成果として伝えていきたい。

遠藤委員

- 「学び」の場である学校を支える地域の在り方について

先日、山形市内の中学校を全部回った。フロアホッケーの全国大会ポスターを貼って欲しくて一人で全て回った。どの学校でも子どもたちが元気に挨拶してくれる。むしろ先生方の挨拶が少なかった。いろいろな標語が貼ってあり、学校は学びの場だと再認識した。一般的に、大人になるとだんだん挨拶をしなくなってくる傾向がある。前向きな言葉、思いを学校は教えてくれていると感じた。最後に回った学校に「元気に登校、感謝で下校」という言葉が書いてあった。社会にも置き換えることができる。会社でも「元気に出勤、感謝で帰宅」である。

先ほど、地域でできることは地域に任せる、というのがあったが、学校では今こそ本来の「学び」を前面に出し、それを地域が支えることの必要性を感じた。

落合委員

- 学校支援地域本部事業におけるコーディネーターの資質向上について

学校支援地域本部事業において、最終的にはコーディネーターが要と考える。コーディネーターの資質向上のためには、講演で先生のお話を聞くことも大事だが、それ以上にコーディネーター同士の生の情報を交換し、具体的な事例を疑似体験して、各々がスキルアップすることが必要と思う。

金澤委員

- 社会教育が果たすべき役割について

高齢者、成人の社会参画と生きがいづくりで、社会教育の領域から何ができるか考えた。それは、人を育てることである。そして「繋ぐ」と「均す」である。

伝統行事にしる郷土食にしる、繋いでいくのは人である。人をつくるのは社会教育の分野でできる。

もう一つは「均す」である。横断的に福祉や農業関係などと連携して横系列のつながりを大事にして欲しい。知事部局や市町部局に繋いで均していく。隙間のところを大事に埋めていく。それが例え補助的な役割でも、それに必要なスキルは社会教育の人材育成のプログラムに入れて育てていく、という形で進めていくと良い。

「繋ぐ」「均す」という部分でコミュニケーション能力を高める研修を社会教育の場でできると思う。

齋藤彰委員

○ 社会教育主事有資格者の活用について

社会教育主事の在り方が大切だと思う。前回、前々回にも話題になったが、各社会教育主事の質を高めるためには、いかに活動しているかだと思う。私は昭和 61 年から 3 年間、舟形町の派遣社会教育主事だった。当初辛かったが急におもしろくなり、現在も社会教育の分野にいる。人は変わっていく。教員の資質向上もそこにあると思う。学校教育を主管する指導課と連携して、社会教育主事を育てていくことが大事なことである。第 4 次生涯教育振興計画が策定され、その中で「社会の要請に応じた生涯学習」という部分がある。それを担うのが社会教育主事である。

○ 派遣社会教育主事の配置について

この夏、島根県の校長退職者と話す機会があった。島根では現在も派遣社会教育主事制度がある。国からの補助は無くなったが島根県では市においては 1/2、町村においては 1/4 負担で派遣しているそうである。派遣社会教育主事を復活させて欲しい。

齊藤一彌委員

○ 地域理解を進める教育の重要性について

「知らない」ということが一番の課題である。山寺中学校に勤めたとき、地域のどこに何があるのか、地域のよさを子どもたちから教えてもらった。初めて校長として赴任した肘折でも「開湯 1200 年祭」にも関わらせていただき、同じように、子どもたちや地域の方から様々なことを教えていただき、「地域には知らないことがたくさんあって、大人でも、地域を歩いてみないとわからないこと」を実感した。

大人が知らないことを、公民館なり地域の中で知る機会があればよい。公民館に行けば全てのことをある一定程度知ることができ、そこから先は自分の足で探求する。それが社会教育の中で必要であると感じている。勤務している山形第四中学校区には神明神社があり、神明神社の例大祭が今年 23 日に行われる。過去 2 年間、新人戦と重なって子どもたちがいけない状態が続いていた。「これは絶対困る」と言い続けてきた。こういったことこそ行政と学校とが調整すべきことではないだろうか。「神明神社は護国神社より歴史が古いんだよ」と言わなければ、だれも理解できない現状である。

もう一つ。山形国際ドキュメンタリー映画祭がもうすぐ開催される。市政 100 周年を記念して子どもたちは入場料無料である。だが、そのことを中学生は知らない。世界に誇る山形の文化を子どもたちが知らないことは社会教育の損失である。2 年前は本校の 1、2 年生全員で山形国際ドキュメンタリー映画祭コンペディション部門の作品を鑑賞した。今年も観賞を予定している。このように、種を蒔くしかけを我々がつくっていくことが必要である。

佐藤委員

○ 地域のキーパーソンについて

午前中、江南公民館文化祭の会議に出席し、年配の方々がとても元気であることを改めて実感した。私が居住する地域では、社会教育協議会の会長や、地区会長がキーパーソン

であり、例えば「社会科で戦争の話をして欲しい」などと相談すると、すぐに適当な人材を講師として紹介していただける。大変ありがたい。

○ 地域と学校を結ぶPTAの活躍について

山形の学校は本当に恵まれていると実感している。保護者や地域の方がたくさん学校にきてくださる。本校では「読み聞かせの会」の方々30人以上からかかわっていただいている。子どもがいなくても、毎週集まり、本の情報交換を中心に昼ごろまでおしゃべりされる。多くの方は図書館ともつながっている。また、「親父読み聞かせの会」では、企業の方や医師など、朝、忙しい合間をぬって学校に来てくださる。「学校にいこうよ」という雰囲気やPTAがつくってくださっており、「無理なさらないように」とお話しすると「私たちは楽しくてやっている」との返答がある。

楽しさを入り口にして人の役に立つことができるなら、これほど素晴らしいことはない。私もそんな風でありたい。

山川委員

○ ネットワーク型行政の展開に向けた社会教育的視点の必要性について

行政、企業を問わず、様々な機関や団体の横の連携がとても大切である。来年は「山形ディスティネーションキャンペーン」を中心に、「蔵王樹氷国体」、青年会議所の「アスパック」、開催がほぼ決まりかけている「六魂祭」、金山町での育樹祭など、大きなイベントが目白押しである。

例えば、山形ディスティネーションキャンペーンは観光誘客に向けた大イベントである。キャッチフレーズ「山形日和」とはどんな天気を指すのかと観光関係者にお尋ねしたところ、「山形らしい穏やかな天気、さくらんぼや周囲の山々や紅葉が美しく映えるお天気」と教えていただいた。社会教育的な発想で解釈すれば、最上川一つみても、「熱き日を海に入れたり 最上川」、猛暑の暑い夏も山形固有の日和であるし、「五月雨を集めてはやし 最上川」、梅雨の季節の雨降りも山形らしい固有の季節、「最上川 逆白波の たつまでに ふぶく夕べと なりにけるかも」、冬の時期、北西の季節風によって川面に逆三角形の白波が立つ悪天候と言われる日も山形固有の日和であるということになる。色々な知見や体験を組み合わせることにより、一つのキャッチフレーズにも地域の味付けができるだろうし、深みがでてくる。

他所からお出でになる人は、知らないことを学ぶことが心に深く残るものである。知らないことを学ぶ機会を提供することも「おもてなし」の一例かも知れない。県行政も含めて横の連携を密にして社会教育的な発想を地域づくりに取り入れていただきたい。

山口委員

○ 県教育委員会と各社会教育施設との情報交換機会の充実について

先ほどのグループ討議では、「高齢者の活躍の場所が身近なところにたくさんあること」や、「グループをどういう形で立ち上げていくか」などについて、貴重な勉強をさせていただき、大変参考になった。

将来の豊かな生涯学習社会をつくりあげていくうえで、各教育事務所や、生涯学習セン

ター関係として、自然博物館、うきたむ風土記の丘考古資料館、県民の森など、加えて、図書館、博物館、少年自然の家、青年の家、そうした施設と県庁の担当者が話し合う場を設定し、苦労や課題についての情報交換の機会を充実させていただきたい。先の施設が前面に立って、子どもたち、あるいは青年たちをしっかりと育てることこそ、将来の豊かな生涯学習社会づくりには必要なことである。県庁担当者と密な関係を構築することは、現場で働く者にとって心強く、働き甲斐が強まり、県内の人材育成力が高まるものと思う。

回答（山川課長）

年3回、社会教育施設長会議を実施しており、加えて、できるだけ現場に足を運び実情を聞くように努めている。博物館、図書館については、行政機関職員はもとより、外部の方も交えた運営協議会を設置して御意見をお聞きしている。学校との連携についてなど色々な課題を抱えているが、関係機関と情報交換を行いながら施策を推進している。

山口委員

年度末の会議では、どのような課題があげられているか。

回答（山川課長）

年度初めの会議においてそれぞれの施設の年度計画をお聞きする中で、上手く行っている点や利用率低下や学校との連携体制整備などの課題などが挙げられていた。予算の時期を迎え、改めて来年度に向けての課題を聞いて取り組んで行きたい。10月に施設長会議が予定されている。

山口委員

各施設との情報交換機会の充実に努められていることをお聞きして安心した。何かの機会に、そうした施設の運営状況についての情報をいただきたい。

横山委員

○ 地域の人々が活躍できる場について

新庄市の社会教育委員も務めている。「地域で社会教育委員として実際に役立っているか」と常に自問し、自分でも実際に活動することになっている。学校においては、読み聞かせや、書道クラブのお手伝いを友人と共に行っている。地域では、民生委員や区長とともに日赤ボランティア団体の活動として、老人向けの多目的多機能施設に入ってボランティア活動を実践している。具体的な活動内容は、花植えや掃除。加えて、私たちが楽しめるような輪投げやカラオケ、踊りの発表などである。地域に公民館がないことから、先の多目的多機能施設での活動において、地域の結びつきに目を向けた防災関係の勉強にも取り組んでいる。地域の人々が活躍できる場は、大小様々である。小さな場であっても、現在の活動者の後釜となる人をつくるモデル的な地域になればよいと考えている。

○ 地域の人材育成に向けた社会教育委員の在り方について

地域で活動する人づくりをするのであれば、地域に張り付いている民生委員のように、社会教育委員が活動の場をもつことが必要である。社会教育委員が地域で何らかの役割を担い、公民館に任せない、行政に任せないようなことをやっていける方向になっていったらよいと思う。

舛田委員

○ 成人、高齢者が活躍する場の提供について（高島町立二井宿小学校の取組み）

斎藤彰委員、山口委員からの報告、また、みなさんの意見は大変参考になり、ワークショップ形式の勉強会は大変有意義だった。大学を離れて 10 年が経過しており、当時のように実証研究と称してフィールドワークすることもできず、現場の様子がつかめないでいた。そのような中、いろいろな話をお聞きして有り難かった。成人期、高齢期の生きがいづくりを中心として考えた場合、活躍する場はどこにでもあると考えてよい。

真室川町での県の大会のときに、高島町の二井宿小学校、伊沢校長からの報告をお聞きする機会があった。「学校給食の食材 50%を自給しよう」という取組みであり、先生方を説得されたときの様子や、その後、地域の方に相談しながら取り組まれた様子をお聞きした。就農している保護者に協力を求めた際、次々に問題が生じ、月 1 回、「ワンカップ会議」と称する夜の会合を重ねたそうだ。「お酒はワンカップのみ。それ以上は飲ませない。」という会のルールも興味深かった。地域の中には佐藤さんという 80 歳を超えた老人がおられ、毎日来校して助言された。職員室の中には佐藤さんの机まで置かれ、佐藤さんが常駐する形で事業を進められたそうである。結果的に、本当に野菜とか米の 50%を自給することに成功。近くの保育所でも同様な取組みが実践され、さらに、野菜が余った際には、地域の方が行列をなして買って行く「即売会」まで開催した。学校と地域の連携には大きな可能性がある。しかし、残念だが、そういった連携は、校長先生の努力と、学校に常駐するような佐藤さんの努力によって成り立っている。校長が退職された後どうなったのかまではお聞きしていないが、中心となる人材がいなくなっても、よいシステムを維持できる体制をつくっていくことが課題である。

○ 成人、高齢者が活躍する場の提供について（大分県日田市の農協の取組み）

次は大分県日田市の例である。地域のお婆ちゃんたちが作る日常の郷土食を、道の駅のレストランで販売したところ大盛況となっている。11:00 頃から大きなお皿に盛り付けて販売するのだが、普段作っている料理が商品なることはお婆ちゃんたちにとっても大変な喜び。小遣いも入り二重に喜ばれているとのことだった。生きがいは、共に汗を流して動いて、その上で何かが成り立って、参加者の息が合ったとき、また、自分の仕事が上手くいったときに、初めて感じられるものである。そのためには、「仕掛ける」ということがなければならない。先の大分県の事例を仕掛けたのは農協職員だった。先のグループ討議でも各班で話し合われたように、「仕掛け人としての人材育成という問題」、「学習の場としての公民館の役割」、「他機関との連携の問題」は本当に重要な視点である。これまで見てきた事例やみなさんのお話からも、人材育成が本当に重要な課題であることが理解できる。

○ 社会教育主事有資格者の活用について

地域で重要な役割を担っていた派遣社会教育主事に代わる人材を養成する問題、学校に所属する社会教育主事有資格者を活用する問題など、今後も継続して検討していかなければならない。

5. 連 絡

舩田委員

- 山形県社会教育研究大会の開催について

県の社会教育委員連絡協議会の立場でお知らせしたい。今月 27 日に寒河江市で県の社会教育研究大会が開催される。会場は寒河江市民文化会館。ぜひ委員各位からも参加していただきたい。

安藤委員

- 教育問題研究集会の開催について

10 月 12 日の土曜日に教育問題研究集会がビッグウィングで開催され、午後、門脇厚司先生の講演が予定されている。門脇先生は、現在山形新聞に月 1 回寄稿されている、山形県庄内町出身で、「子どもの社会力」の提唱者である。

事務局（佐竹室長補佐）

- 本会議議事録の県ホームページへの掲載について
- 平成 25 年度第 3 回会議の開催日程（2 月 12 日・水）について

6. 閉 会